

に にこにこ笑顔で

い いつもみんなで

っ 紡ぎ繋げる心で

に 日本一をめざすのだ

## 「金」がもたらす光と影と

大学時代、所属していたクラブのトレーニングの時間に、大学周辺をランニングすることが度々ありました。キャンパスから少し離れたそのランニングコースの途中に、当時、新聞やテレビのニュースでことあるごとに報道され世間を賑わせていた渦中の人物が住む大邸宅がありました。

その家の正面の門前には、いつもマスコミ関係者が待機していて、興味本位で自分も塀の外から中を覗こうと、仲間と一緒に近くの木に登ろうとしたら、警察官が慌てて走ってやってきて注意されたことがあります。

その大邸宅の主は「田中角栄」。その家は、所在地の町名をとって「目白御殿」と呼ばれていました。

「田中角栄」。その名を聞いても、生徒の皆さんは、名前を耳にしたことはあっても、どういう人か知らないという人がほとんどかもしれません。お父さんお母さん世代も、氏の人生の絶頂時の頃はまだ生まれていなかったはずです。氏に対する記憶やイメージは、晩年の姿が大方でしょう。

言うまでもなく、田中角栄は、第64・65代内閣総理大臣（首相）だった新潟県出身の政治家です。その膨大な知識と経験、明晰な頭脳と、徹底してやり抜く実行力・決断力から「今太閤」「コンピュータ付きブルドーザー」などと称されていました。

しかし、総理大臣在任中、アメリカ合衆国から国が航空機を購入する際、アメリカの特定の企業に便宜を図る見返りに数億円のお金を受けとったということで逮捕されました。その、いわゆる「ロッキード事件」は、昭和の歴史上最も大きな出来事だったと言っても過言ではありません。総理を辞職し離党した後も、政界で隠然たる影響力を持ち続け、「閥将軍」「影の総理」などとも呼ばれていた稀代の政治家です。

しかし、毀誉褒貶はありながら、昭和・平成・令和の歴代の総理大臣の中でもダントツの人気を誇り、現代のリーダーシップ不在の混沌な社会にあって「田中角栄がいたら」と今なお巷間でもてはやされるなど、強烈な個性の持ち主であったこと、そして、今後、時代の経過とともに歴史上の人物として名を残すことは疑う余地もありません。

世間一般的には、そして教育者としての立場から言えば、逮捕・起訴され有罪となった事実はもちろんのこと、氏の政治手法は決して許容できるものではありません。しかし、個人的には、私は田中角栄が大好きです。氏の人間的魅力は計り知れないものがあります。決して私腹を肥やすような人物には思えず、国民や国のことを誰よりも考えて身を粉にして働いた立志伝中の人物だと思っています。どんな憧れのアイドルタレントやスポーツ選手よりも、生前に実際会ってみたかったと思うほどです。

来週 12 月 24 日、新聞記者時代に、その田中角栄の番記者（特定の取材対象者の動静を継続して追いながら、情報やコメントを引き出して記事にする記者）であった現新潟日報相談役の小田敏三さんから、全校生徒に「生き方講話」をしていただく予定です。

地元の新聞記者として当時の田中角栄の一番身近にいた人物の一人である小田さんは、日本一有名な政治家と間近に接しながら、日本の政治のど真ん中で報道に携わっていた方です。また、横田めぐみさんの拉致問題にも熱心に取り組むなど、新潟日報の敏腕記者として活躍し、その後、新潟日報の社長として新聞社経営に長年携わってきました。昭和の生き字引、生の田中角栄や拉致問題を知る方のお話を、生徒以上に私自身がとても楽しみにしています。

「新聞と私、今中学生に伝えたいこと」と題した講演の内容ですので、保護者や地域の皆様の参加も大歓迎です。また、講演後に、お子さんから話を聞いて家庭で話題に出していただければと思います。

さて、先日、恒例の日本漢字能力検定協会による今年の漢字が発表されました。2024 年の漢字は「**金**」。パリオリンピック・パラリン

ピックの金メダルラッシュ、大谷選手等国内外スポーツ選手の値千金の活躍、政治の裏金問題、高額報酬の金目当ての闇バイト、などの世相を反映したものと解説されています。

今年の漢字に「金」が選ばれるのは30回目で今年も含めて5回目です。なるほど「金」は、いつの時代も我々の生活に密着しているとの証左でもあります。記者時代の小田さんの取材対象であった田中角栄も、その金権体質を批判され、拉致問題の元凶も、金正日・金正恩の北朝鮮でした。

「金」をとりまく光と影はいつの世も我々にまわりついてきます。光が降り注ぎ陽の当たる対象があれば、そこに必ず影は生まれるのです。

子どもたちの進む未来は、「金」の如く光り輝く世の中や個々の人生であってほしいものです。一方で、影のもたらす課題や困難に決して目を背けず、影に取り込まれず、影に翻弄されない人生を送ってほしいものと願っています。

黄金の国「ジパング」に生まれてきた人間として。

田中角栄の功罪は枚挙に暇がありません。その中で、高等教育を受けずに苦学した田中角栄は、教育問題、とりわけ公教育の重要性を誰よりも認識していました。

首相在任時には、公立学校の教員給与を引き上げ、人材確保法により、教員の地位や質の向上に努めました。彼は、現在の教員のなり手不足の現状を、あの世からどのように見ているのでしょうか。教員の金の卵はいずこに、と。

また、彼は、1945年の国政選挙への初出馬の際、このような演説をしました。

「三国峠を崩せば新潟に雪は降らなくなり、崩した土砂で日本海を埋めたら、佐渡まで陸続きになる」と。この豪胆な大風呂敷の実現性はともかく、その大胆な発想とスケールの大きさには舌を巻きます。

佐渡の陸続きは荒唐無稽の話でしょうが、郷土愛に満ちた彼は、世界遺産になった佐渡金山を、ふるさと新潟の誇る金字塔だと誰よりも喜んでいるかもしれません。